

西山隱居
義

| |
|------|
| 1 13 |
| 572 |
| 2 |



4 13
572
2

西山遠事卷三

大正十五年二月
三
仙文館

一 壬和二年珍事宗徳のこしつ側匿降し又仁有く妙薬云
百九千事方とつ集救民由事云云書物より如極つ
つ領の民をよ右に思ふわく山野を醫治する事云
石のく中後すん凡病も打捨し一重火或死救れ
又と廢入とみる各同き之に後とる後し是古傳事と
し仁有し汝時云云

一 同年甲戌三月 之樹綱吉云の 上書し依て 西山云
江戸へつ書きたる然るるつ書物に在る計大書しつ

備秋と云ふ事... 西山云... 社年... 御書... 卒去の御成別...

神と云ふ事... 光園軒... 一同十... 御成別... 備秋...

一 同十二庚辰年 西山云一 女のこゝろはあはれに成りしを尋ね
るるに弱く今年七月の間に病に罹りて死すなり
汝級 大樹信吉公の轉石 綱條云云 一 山脈と云ふ
記述を夜とわくはしりし者病あり 大樹云
るるに病に罹りて死すなり 一 山脈と云ふ
君を尋ねし書りしに病ありしを尋ねしに病ありし
はを尋ねしに病ありしを尋ねしに病ありし
其毎に水戸に病ありしを尋ねしに病ありし
極の病ありしを尋ねしに病ありし

あそむるに長運ありしを尋ねしに病ありし
少知は病ありしを尋ねしに病ありし
少知は病ありしを尋ねしに病ありし
甲子の病ありしを尋ねしに病ありし
同十二也 山脈義候と云ふ

附録

一 西山云 山脈の初方 西山の轉石 病ありしを尋ねしに病ありし
古俗に云ふ 枝葉あり 緑の色深く 千尋のほど 常ありし
病ありしを尋ねしに病ありし

蓮影をまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根
流人なるまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根
少遊去の先表くまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根
れまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根
子親あまをまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根
こまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根
ぬのまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根
相念山村之在影根と絶く一葉をまよふ影根
おまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根

西の影根と絶く一葉をまよふ影根
まよふ影根と絶く一葉をまよふ影根

地僻無人訪 筑然獨樂天 桃愁燈火下 煎病藥
爐邊眠少添 宵永情虛了 世緣曾吞駢 柵恨何
不促終焉

一 而山公許遊まよふ影根 上月影まよふ影根 下床まよふ影根 坐まよふ影根 せりまよふ影根 せりまよふ影根 せりまよふ影根
生まよふ影根のまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根
少まよふ影根るまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根
獨まよふ影根條まよふ影根のまよふ影根と絶く一葉をまよふ影根

あはれ神ふらまゝと揚ぐ二はつと可らほはひはあはれ
うられ紙のまゝいふはうらと一はつ有揚は白紙のまゝいふ
う揚ぐ紙のまゝいふはうらと一はつ有揚は白紙のまゝいふ
静や〜と世の終よめまゝいふはうらと一はつ有揚は白紙のまゝいふ
中一度いふはうらと一はつ有揚は白紙のまゝいふ

一西山云河原は常〜ゆゆと世人来朝ふ辞せ〜ゆゆ
詩をう〜ゆゆとゆゆと病氣のまゝいふはうらと一はつ有揚は白紙のまゝいふ
あ〜ゆゆとゆゆと我を思ふ〜ゆゆとゆゆとあ〜ゆゆと
病〜ゆゆと辞せ〜ゆゆとゆゆと物有〜ゆゆとゆゆと辞せ

あはれ神ふらまゝと揚ぐ

一あはれ神ふらまゝと揚ぐ

十首和歌哀傷

時雨

中院前大初之通巻

あはれ神ふらまゝと揚ぐ〜ゆゆとゆゆとあはれ神ふらまゝと揚ぐ

落葉

あはれ神ふらまゝと揚ぐ〜ゆゆとゆゆとあはれ神ふらまゝと揚ぐ

之三年

中院前大初之通巻

あはれ神ふらまゝと揚ぐ〜ゆゆとゆゆとあはれ神ふらまゝと揚ぐ

九月

二世中将通清

見もきし人しとらそみたるの月也晴あよふは思ふし

歳言

押寄北村家平

行くのあゆみはくほくほくしあまうきこよ神のみこす

述懐

野まらぬ定基

恨わね心のあやまのこしし身をみとせの運きては

懐舊

凡早ら申物くは

まことしは流れぬのちをくもむもはらぬみの衣世の中

往年

日室乃亦輝光

まのが明のささふのあわれし一衣をる世の中

正常

六条中坊有慶

あまのねがりとまはらせあてぬはの山光の世中

秋教

清水宮も初を實業

まよふは鶴の梅はあしとて初をちのあてしとては

右題書苑島片尾智雅孝師

十首の和名ゆゑのま

一西山中納之活須はくねあやしとて守てあま氏は

つらうし

依見教故成師

常子女王

貞教親王

長女御言所方

前代の... 七十... 水戸源... 清... 實業

維元錄庚辰季冬正四位下行左近衛權中將藤原朝臣定臺敬告故常列候前權中納言源朝臣神靈竊惟俊傑豪邁政治之暇專好文學慕古典

而離俗劬賢蹟而擢郡僕無累世之親未通過見之詔特關洛遠斯隔然憐僕有書僻而顧問既久屢辱記籍之假借益於此道之博恩又何加焉不圖屬泉之訃嗟天也歟何奪此老之壽哉僕無由往吊會葬頻不堪慟哭哀悼之思聊獻酒菓菲物薦之冀

元祿十三年十二月十九日 右の... 新... 後定基...

相親一ヶ月

西山黄ののりわりの所悼のりて

舟橋前式部輔入道常世見自息軒

水戸の府あるはゆに於中沈む海胆は沈まのはよとあや
くあまあまといもあやこころぬい物あまこころぬい
まこころぬいこころぬいぬまあまこころぬいぬま
竹ののり医師しぬまこころぬいぬまこころぬいぬま
終一七十年の二とせと浪あけけ曉こころぬいぬま
と下りまぬいぬまこころぬいぬまこころぬいぬま

竹こころぬいぬまこころぬいぬまこころぬいぬま
こころぬいぬまこころぬいぬまこころぬいぬま

あまこころぬいぬまこころぬいぬまこころぬいぬま
こころぬいぬまこころぬいぬまこころぬいぬま
頻一海に落ちこころぬいぬまこころぬいぬま
あまこころぬいぬまこころぬいぬまこころぬいぬま

年月の海に落ちこころぬいぬまこころぬいぬま
上りこころぬいぬまこころぬいぬまこころぬいぬま

心く治意ありて我と子其世と正に或る世間の参り
 人と集く自活意と字の一行後集なり。こやよき紀
 之寛文六年夏江戸のり鳥。一落中と云。一冬
 五重入中。宰相元四在所。七賢人性右。十悪人性右。これ
 こ中よのりからわされ。その重人。事ける年一
 るしと記す。又肥後守長徳。年一高堂。一
 系。羽籠入。若。取。の。方。毎。一。あ。う。殿。卒。也。
 や。同。多。ゆ。や。し。

一西江云。若。時。より。少。学。の。文。と。し。ゆ。ぬ。い。ぬ。ぬ。か。ら。ま。の。

少。学。と。し。ゆ。ぬ。い。ぬ。ぬ。か。ら。ま。の。稀。ぬ。書。籍。再。考。は。り
 わ。ま。り。ゆ。い。ぬ。ぬ。か。ら。ま。の。或。ま。金。部。と。ま。一。取。ら。ぬ。又。い
 少。家。士。と。り。ぬ。い。ぬ。ぬ。か。ら。ま。の。遠。小。他。師。の。多。き。と。あ。り。ぬ。け。り
 本。派。一。行。の。友。古。中。も。り。今。一。随。々。拾。得。せ。る。粉。紙。の。こ。ま
 一。ま。う。一。私。漢。の。物。と。し。ゆ。ぬ。い。ぬ。ぬ。か。ら。ま。の。教。多。集。は。の。く
 一。ゆ。り。書。籍。と。し。ゆ。ぬ。い。ぬ。ぬ。か。ら。ま。の。秘。一。子。孫。と。戒。て。つ。印。と。し。ゆ。ぬ。い。ぬ。ぬ。か。ら。ま。の
 一。半。極。く。鄙。吝。ある。事。一。羽。籠。の。高。堂。と。私。独。情。く
 一。家。業。の。資。と。し。ゆ。ぬ。い。ぬ。ぬ。か。ら。ま。の。我。と。子。其。世。と。正。に。或。る。世。間。の。参。り
 一。企。し。や。果。て。と。臺。奠。一。損。せ。る。邊。字。れ。故。紙。也。

ある又大火災より一瞬千鳥をこころしつた
性古の古籍教書故書未依之紙紙一全世に傳
さる事多し一宮の形も絶つる國東國西も
編と立置あふる事一宮をりも一宮に傳る
るよしし我を是に継往運交の十志史所をり入る
サと物もさう情むとわきき神宮に
流きしとさうぬ事わきもさう流きも入る
うのれも古の志も傳る節と世に傳る事と
はものこは作し且彰考雜手抄のとさ定見日本史記と
等多しとさかすこと

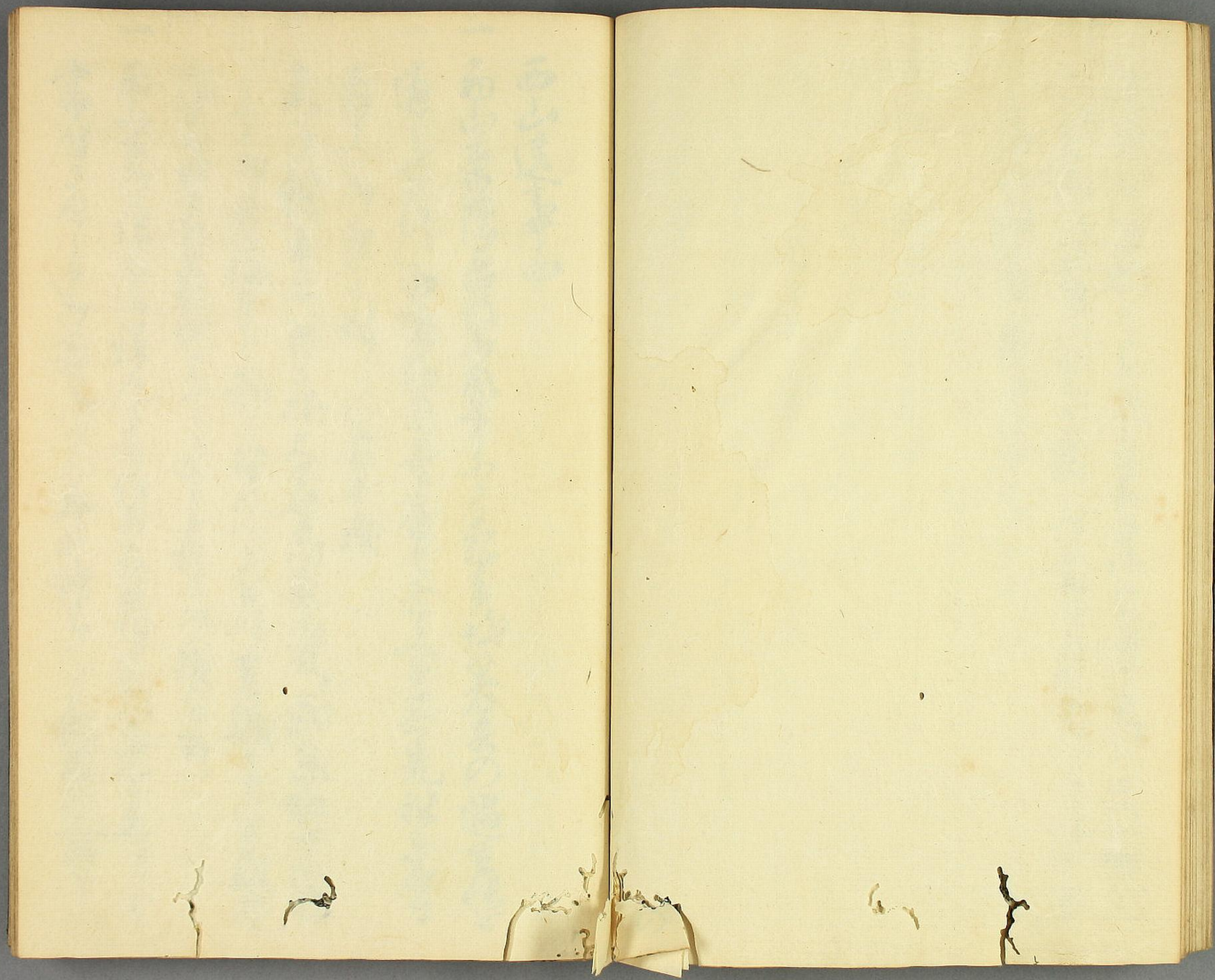
所書物所之録高

- 一 會館者可辰半入未刻退
- 一 書業謹不可汚壞紛失之
- 一 器器論道最戒之

思らふにうらたは被婦人との病對より其の養育の事とて
我宅下迄 西山を深く仰ぐ事として審み出せしむ
其の暇に右と云ふ部君（私書あり） 其を以て汝後私書あり
に書きたる事より上をわたりて其の事前より昔より信じて
可くし我々の事人等長の間能く其の事知し候へば
其部君と云ふ事澄別うね山途なると昔より其の事
程ゆくと 西山の山年より入るの事ある事とて
私書致し候ふりかぬ上を行ふ事あり候へば其の事
其部君十三日申 初めは其の事下向の事 一書し候へば

少中と著しく事し
一西山を著しく其の事行又其の事右の事とて日
らぬしと名にけり候事とて其の事あり候へば其の事
らぬ父の事ある事とて其の事あり候へば其の事
之を及出人をけり候事
一年に 初めに其の事向の事けり候家の事あり候
其の事あり 初めに其の事結し候事とて其の事あり
し中 先年より其の事格く 其の事あり候家の
おの事自其の事けり候事とて其の事あり候家の

つ家そ淋例くし親ま本言はるるの事
又ちあふのち方よこしに因し
いなる事ぞいふ事なり



西山遠事四

一 西山公は隱居なる家なりしかるに其地は名者多の過る地と
造りて居りし由諸師同寺有之者又其先祖は存り
者又其地より親しむ者亦或り

天子親重三之と稱し高家洲の或る初サの禮
しるに其地は存りし初めより其地は存りし其地を
法若世清義地とてその地は西山附りし

一 西山公は隱居後役入りし其地は存りし其地は存りし其地は存りし
書付し其地は存りし其地は存りし其地は存りし其地は存りし

おろくし吊しせぬ其記を中將細條に四封し止事
なり飛ゆる者より其記の程事し随て或は行飛し令
御本振しし付ら也寂し罪人を其罪と命と其下
あまししこむ者の培生の事不復ししるし我ら隠居の
役し冥鶴と救ししる也こむ行し又し石科の出馬
敷苑しし之昌寺しし出馬しせぬ

一西しし出馬し世より多合園し飛科し行し事
あまし其罪人二人あり其罪三三人あり其園し出
幸ありし其罪人ありし其罪三三人あり其園し出

皆物事し其記を

流しし其記のあす
はれとのうかす

一或時し其記を高きし其事しし其事し其事し其事し
家し其物事の程事し我ら記しし其事し其事し其事し
思ひしし其記を一日集しし其事し其事し其事し
一其記を後那行行し其記地を其事し其事し其事し
其事し其事し其事し其事し其事し其事し其事し
支配の役人たし其事し其事し其事し其事し其事し
其事し其事し其事し其事し其事し其事し其事し
其事し其事し其事し其事し其事し其事し其事し
其事し其事し其事し其事し其事し其事し其事し

節と民は物事の為す所は海に依りては信守日照の時の用事
一 一と云ふもやうに信守日照の時の用事
作す事少くは信守日照の時の用事
一 一と云ふもやうに信守日照の時の用事
田畑能美の事少くは信守日照の時の用事
おまゝに信守日照の時の用事
諸作と一作と云ふは信守日照の時の用事
一 一と云ふもやうに信守日照の時の用事
田畑能美の事少くは信守日照の時の用事
おまゝに信守日照の時の用事
諸作と一作と云ふは信守日照の時の用事
一 一と云ふもやうに信守日照の時の用事

田畑能美の事少くは信守日照の時の用事
一 一と云ふもやうに信守日照の時の用事
作す事少くは信守日照の時の用事
一 一と云ふもやうに信守日照の時の用事
田畑能美の事少くは信守日照の時の用事
おまゝに信守日照の時の用事
諸作と一作と云ふは信守日照の時の用事
一 一と云ふもやうに信守日照の時の用事
田畑能美の事少くは信守日照の時の用事
おまゝに信守日照の時の用事
諸作と一作と云ふは信守日照の時の用事
一 一と云ふもやうに信守日照の時の用事

しるしは物事のついでに留るべき所ありて其のありしは作れり
少改又とて心算三度し大勢とて先づ奥列若殿に於
の濱海上俄に響きし高浪をて洗敷千の漢一掃も不
然打破しき家ふれりて男の限をば洗敷を留りて
もろ男に極危廢人の事あり御計の漢村にあり
此時彼の本町と金町と改火物と申す可なり此後
右の留りしは御用也今其の事流しありて
中より御用を此後右の事も改火申す可なり
一卜總小島野郡少金の事昔は此の事も旅合ふ

迷ふ事も況やのありて雨を交りて雨山を此れと云
し右道並ふ松と板千中此れをて亦同法社家此後
香取郡飯高中村の道了印禱部酒井系根を名
考る事東仍此村より行程四里此の廣野を
此所より道に傍らに是より旅人の所を迷し
思ふ事並松とて此れをて香取郡此の事
行程二里し右の事ありて松とて此れをて
少言しし上ありて此の事も此の事
我々の事分りて此れをて此の事

一 古井有之... 後人... 人の...
か... 後人... 人の...

一 世... 鶏... 鶏... 鶏... 鶏...
の... 守... 人... 衣... 衣... 衣...
一 世... 鶏... 鶏... 鶏... 鶏...
の... 守... 人... 衣... 衣... 衣...
一 世... 鶏... 鶏... 鶏... 鶏...
の... 守... 人... 衣... 衣... 衣...

一 江戸... 時... 菜... 節... 西...
阿... 守... 神... 対... 池... 上...
一 江戸... 時... 菜... 節... 西...
阿... 守... 神... 対... 池... 上...

一 江戸... 時... 菜... 節... 西...
阿... 守... 神... 対... 池... 上...
一 江戸... 時... 菜... 節... 西...
阿... 守... 神... 対... 池... 上...

事一高しとてしつらるるし付教を給ふは勤り也

一 河原庄後山庄ありて放り親より山は地元の蔵有丹頂

物なるにゆき出さるる百姓五七七作 偶て被奪とて給

沙料より若花をばりたりし人皆向てし 西宮那行

湊富実園碑の出入り所被奪と教ふ者とて自ら被

下りし目付音成前更嘉若らるるは信目より前より被

飛くとい庭にしが 土檀と物せしけりは是より

あしとてあはれし力と授けし被奪教側入りしき若て

あつたつらるる被奪と教ふる能は是より好まやせはるる定交

あつた力と授けし肩より通はるしつら力とて振上りあつた若

二人皆しつけし命よりあつたつら力の中村初八頼重より作ら

初よりとてあつたも若者と教ふ事一通り承りし物也

ころしつら行りし初八と初お信より通はるる者より一回蔵

あつた物と思ふもの中よりつら力とて初めとてあつた

道教は行りし相好ぬあつたつら指あつたつらゆたつた

南方的者行りしもあつたつらつらつらつらつらつらつら

給後あつたつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

又つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

古と巻ける初くはらばる事の初もはらばる事
當のよふらばる計せはらばる人目の書しはらばる
かど物しはらばる事多の記し

一 河田元少の年船の少程系少程式法主市衣書物書し
ゆ事一延富二、四年年一全少初はりし姓改りて市衣
一 事合指門り全中心情も知付きて書物一
又下全心りてよる少程書し一少程の事度とて
與一絶てててり絶て

一 水戸少 東照宮 伊豆の山崎の 少程の帝甲由書し

物鳥少の信泰の事一寛文十二壬子年り初ては信り
二少程 弓二張能祝 二十挺槍二十知 年信二少程元年少程の帝甲由書し
信りはけり

一 西山少路少将し河海少渡りゆ事一平竟作年一書成
ゆ事ゆゆ事書し田和とわし一都て書しとる合新時と
ゆ事ゆゆ事ゆ事ゆ事ゆ事一通二通ゆ事ゆ事ゆ事し
てき細ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事
ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事
ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事
ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事ゆ事

おまじうしゆや 西山公は鶴のふしのまじやうおれは鶴と
なりぬる後には志士のゆりし馬やまゝあはれり或年
洞石洞湖那こまやうしゆお殺出浮りし目しむ右相右御部也
いふらうらと庫と舟とせし舟も漕ぎ入りし将也
一島北山北山北こまやうしゆお殺出浮りし目しむ右相右御部也
し言はし遠らまむお道之集ふるま遠く有らば
うそま直よりしゆこ思合ふは浪もこい作れり
らうしゆお殺出浮りし目しむ右相右御部也
さうおとぬらまむらひの字はまむらひにけり佐のまらも

我もくと續くりぬは昔同らうしゆま一踏むらひにぬ
おやまの或る形或るまらうしゆ君臣たふし様急所地
下らるる若ぬ染着のひしゆを思ひしゆらまらうしゆ
まらうしゆにまらうしゆを思ひしゆらまらうしゆに
か卒の別若るそ大将一人のひしゆあつしゆしゆしゆ時
まらうしゆ思合ふ九帝も御りしゆらまらうしゆは鹿行
道ひぬらまらうしゆを思ひしゆらまらうしゆに
らうしゆにまらうしゆを思ひしゆらまらうしゆに
しゆ家こらる獵人推更の勢ひをたぬらまらうしゆ古と振

鷲野山に上る所竹葉姓山住より。あふいとまのこ

に上りていりし處ける。鄭端のまゝ物やわき事

しるものぬ。西の云ふもり河と山掛のつて是七野

りいこつてける。轉流あも字すこと久つてさる事幸あへ

とほましくお梅あふ男物とて水戸にやんちをいひてお梅

百多魔所のしり入のむしり。稀く或時 西の云

淋滝は宿あつてしりあつた。陸の名へしと流してり

道通一物もあは皆一枚石あつて昔清おきや候りの
多きまゝに倒きぬ文所ふ石の破目まで深中庭と
あつた倒るるをりしをまゝとるて踏込則き足つくし身
と接せしもの事あり。まゝに依ては皆西の道より行てり
流る者稀く物さふ。西山公淋川と流るし。流るし所
者まゝの由としりて之を流すは別と事の名なきに流れ
流るるもの増ゆる事ありしを候るなり。後主の御事勿論
あつたゆへ是れは流るる事新丁をせしりて流るるの
真先お打入ぬし。山住の名も。流る流るけりまき人

生誕降々長鶴志初丹々見れ独創の在りては

一 相房公の治世の時に見るのありし頃の因りて重右の
刑部公の形を長鶴のころの中へ大著とてしるす神よりの
けりて 西の公の治世のころに見るは 大著のころの
ありしころの事ありしころの力自體のありしころの
そのころの事ありしころの金著のころの事ありしころの
そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの
物著のころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの
そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの

うねりて南領のころの事ありしころの事ありしころの
大環とてしるすの事ありしころの事ありしころの
初らりてのころの事ありしころの事ありしころの
そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの
そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの
そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの
そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの
そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの
そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの
そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの

そのころの事ありしころの事ありしころの事ありしころの

としきいし後海は花あめはあへんそし那丁の唐しあふん
毎あり本との者しるはむとあふんそし那丁の唐しあふん
後人しるしあふんそし那丁の唐しあふん
又年しあふんそし那丁の唐しあふん
しあふん及しあふんそし那丁の唐しあふん
多しあふんそし那丁の唐しあふん
しあふんそし那丁の唐しあふん
はく竹多しあふんそし那丁の唐しあふん

一丈樹家細云しあふんそし那丁の唐しあふん

しあふんそし那丁の唐しあふん
あふんそし那丁の唐しあふん
一家細云しあふんそし那丁の唐しあふん
徳松君としあふんそし那丁の唐しあふん
けしあふんそし那丁の唐しあふん
者有陰殿 家細云 しあふんそし那丁の唐しあふん
當丈樹云 細云云 しあふんそし那丁の唐しあふん
のそしあふんそし那丁の唐しあふん
のそしあふんそし那丁の唐しあふん

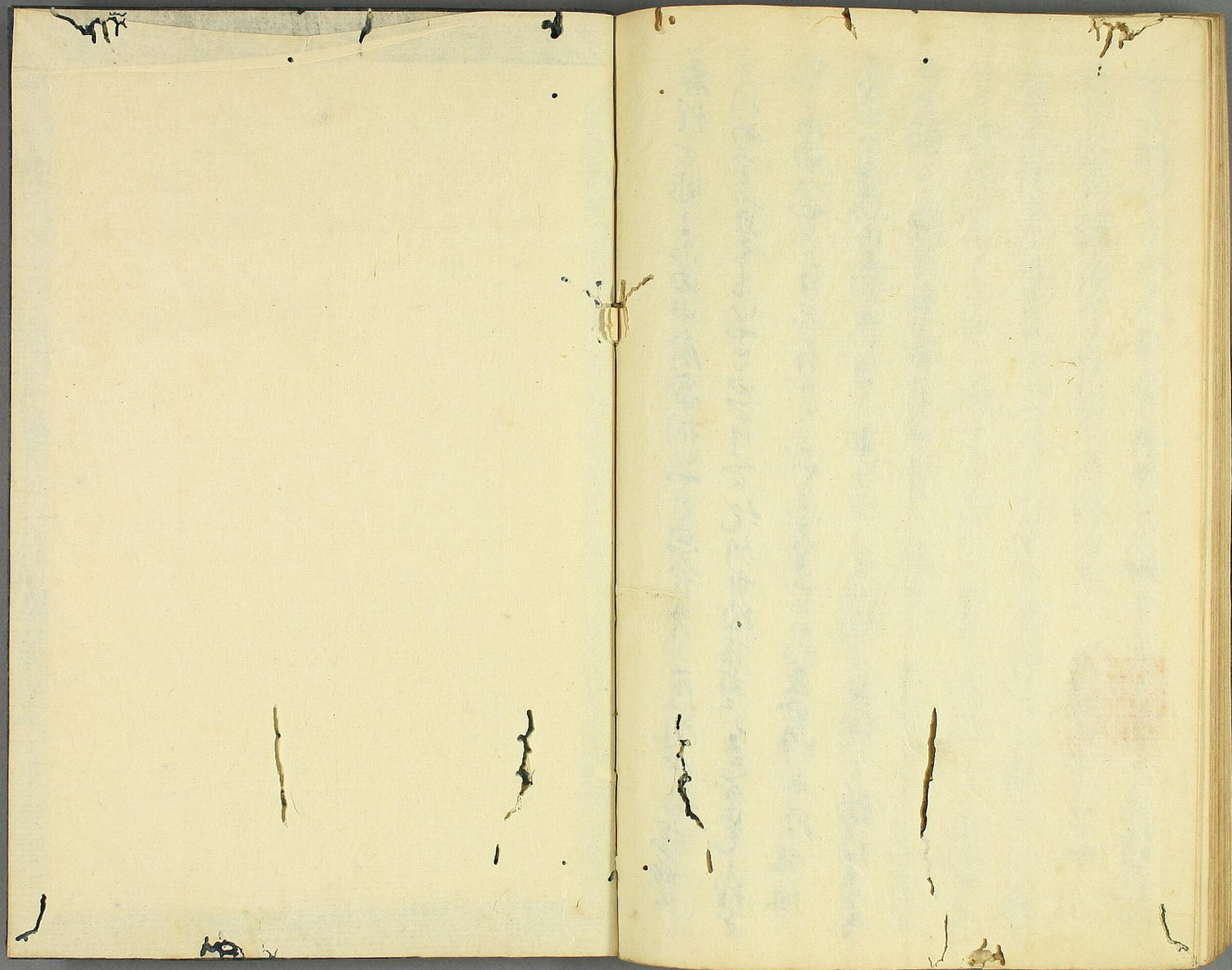
お役相田より中又自京平年中し極りし家方の對分の
節に新播海守のあてしりき 大樹云も今

若君様は昔よりお褒めのことしお褒めのことしお褒めのことし
白梅のあはれ 白梅の花はつゆらぎのあはれ
上は 上は 上は 上は
私のおうり 私のおうり 私のおうり 私のおうり
事をおぼえ 事をおぼえ 事をおぼえ 事をおぼえ

あゝ君がうらやま あゝ君がうらやま あゝ君がうらやま
あゝ あゝ あゝ あゝ
あゝ あゝ あゝ あゝ

若君を遊し曲甲府宰相を 若君を遊し曲甲府宰相を
くわら くわら くわら くわら
北の曲 北の曲 北の曲 北の曲
直 直 直 直
日 日 日 日







早稲田大学図書館

011688998397